

- 中南地域は、県内りんご栽培面積の66%を占める大産地であるが、りんご早生品種「つがる」の価格低迷により、りんごを補完する品目として、**もも「川中島白桃」が農協・生産者から注目されていた。**
- このため農業普及振興室では、**「もも産地育成戦略検討会」を設置。**産地化に向けて関係JAや市町村と連携し、**高品質生産、加工品開発を支援。広域産地化のため統一名称、統一基準を制定。**
- その結果、**産地化面積20ha、販売額4倍増**と産地収益力が向上。

具体的な成果

1 もも栽培面積等が増加

■栽培面積、新規生産者、販売額等が増加し、産地としての基礎を構築。

(H19→H24)

①栽培面積

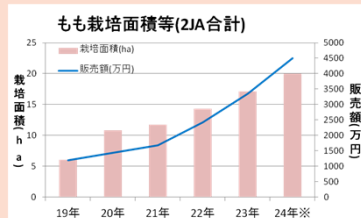
6ha →20ha

②生産者数

60名 →113名

③販売額

1,200万円→4,500万円



2 高品質生産と加工品開発

■高品質安定生産実証

ほを4か所設置し、高圧水噴射による摘蕾の省力化や不織布マルチによる高糖度化、簡易防風網の設置によるせん孔細菌病対策強化等を実証展示。(H23～H24)



■試験研究と連携し、付加価値の高い加工品を開発、地元菓子店で製品化、JA直売所での販売で地域活性化。(H23)

①加工品開発数 0品 → 6品

3 2JAが共通名称、規格で販売力強化

■選果基準の統一、園地相互視察等で技術・品質格差を調整。

■共通名称「つがるの桃」でロット拡大、販売力を強化。



普及指導員の活動

平成19～20年

■りんごを補完する品目として、JAもも部会を中心に導入増加。部会との連携により生産技術の指導開始。

平成21～22年

■重点指導計画に取り上げ、現地講習会、視察研修、剪定会を開催。**技術のレベルアップが図られ、出荷量、販売額は倍増。**

平成23年～

■「中南地域もも産地育成促進事業」(県民局単独)を創設、産地育成の総合的な戦略づくりのため、**「もも産地育成戦略検討会」を設置。**

■「川中島白桃」の高品質生産に向けた取組強化、試験研究との連携、**2JA共通の名称や選果基準の統一**などを推進、広域産地化に寄与。

普及指導員だからできたこと

・専門技術を持ち、他県の技術を知る普及指導員だからこそ、**ももの高品質栽培技術を提案し、地域に適した栽培方法を定着させることができた。**

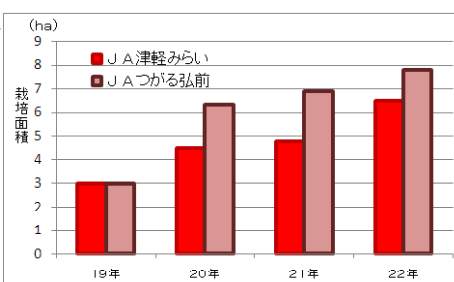
・高いコーディネート力を持つ普及指導員だからこそ、**試験研究や関係者を結びつけ、2JA共通産地育成の取組を進めることができた。**

1. 取組の背景

中南地域は、水稻とりんごの複合経営が主体の地域である。特にりんごは、県栽培面積の66%を占める基幹品目である。しかし、栽培面積の11%を占め、その年の価格形成を先導するりんご早生品種「つがる」の価格が生産過剰と他品種との競合により低迷しており、高価格が期待できる品種や樹種への転換が望まれていた。

このような中、当地域では価格や作業の面から「つがる」の代替品目のひとつとして、もも「川中島白桃」が生産者やJAに注目され、作付けが急増した。

しかし、中南地域のももづくりは、個々の生産者単位から始まったこともあり、生産意



欲は高いものの、主産地に比べると剪定や管理技術及び品質は生産者間で差が大きく、りんごの作業が優先されがちで、販売体制もまだまだ弱い状況にある。

そのため、中南地域県民局地域農林水産部では、この高まった機運を更に盛り上げ、流通販売を意識した生産・加工の仕組みや体制を構築し、本州最北端のもも産地として育成するために、「中南地域もも産地育成促進事業(平成23年度～24年度)」を創設し、JAや市町村と課題解決を図ることにした。

2. 活動内容（詳細）

〔平成19～20年〕

りんごの補完品目として所得拡大が期待され、中南地域管内のもも作付面積の増加がみられた。このため、JAと連携し講習会等で安定生産技術を指導するとともに、もも栽培上問題となっている摘蕾の省力化やせん孔細菌病の防除対策等について調査研究を行い、問題解決を図った。

〔平成21～22年〕

平成21年度より重点指導計画として取組を強化し、JA津軽みらい及びJAつがる弘前もも部会を対象として、現地栽培講習会や視察研修、剪定会を開催し、栽培技術の習得と樹形づくりのレベル向上を図った。

また、せん孔細菌病の発生する園地が多かったため、防除、防風対策等の徹底を図ったほか、りんごとの作業競合を防ぐため、高圧水噴射摘蕾の導入による作業の省力化について実演指導した。

JAでは平成22年度から光センサーを活用し糖度選果に取り組み、味のばらつき解消を図った。また、平川市、JAつがる弘前では単独で苗木導入補助

等を行い、新規作付者が増加した。

[平成23年～]

ももの栽培面積拡大のため、講習会や巡回時に、りんご早生品種の現状やももの有利性及び新植・改植に活用できる事業を紹介した。

また、地域県民局独自の「中南地域もも産地育成促進事業(平成23年度～24年度)」を創設し、産地育成に向けた課題を解決するために、(1)産地育成に向けた総合的な戦略づくり(2)生産技術の普及拡大(3)加工品・加工原料の開発の3つの柱を立てて取り組んでいる。

(2)の生産技術の普及拡大では、実証ほを核とした研修会を14回開催し、省力栽培技術として水噴射摘蕾の実演・講習会を3回実施したほか、糖度向上技術として透湿性不織布マルチの展示・実証を行った。生育不良園については個別指導を行った。

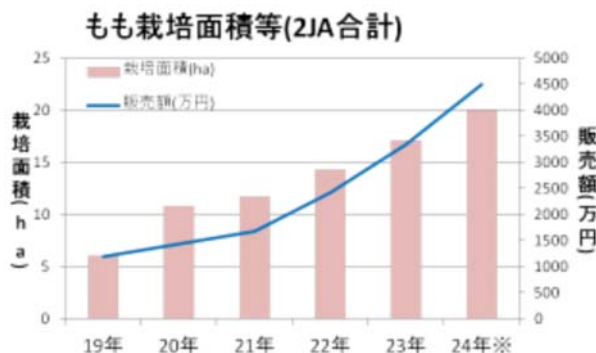
3. 具体的な成果

(1) もも栽培面積等の増加

地域挙げての作付推進の結果、産地拡大が進み、2JAの平成24年度作付面積は20ha、生産者数は113名、販売額は4,500万円と平成19年と比較して大幅に増加しており、産地としての基礎が構築され、栽培農家の収益向上に繋がった。

(H19 → H24)

- ①栽培面積 6ha → 20ha
- ②生産者数 60名 → 113名
- ③販売額 1,200万円→4,500万円



(2) 実証ほを活用した高品質生産の取組強化

高品質安定生産実証ほを4か所設置し、高圧水噴射による摘蕾の省力化や不織布マルチの施用による高糖度化、簡易防風網の設置によるせん孔細菌病対策強化等を実証展示した。(H23～H24)

高圧水噴射による摘蕾の省力化では、摘蕾時間で58%、予備摘果時間で25%、仕上摘果時間で29%削減できることが明らかになった。また、不織



高圧水噴射による摘蕾

布マルチによる収穫直前の降雨での糖度低下の防止効果を検討した結果、効果が確認された。

品質を左右する要因分析による「園地診断技術の確立」と「高品質栽培マニュアルの作成」は現在取組中である。

(3) 試験研究との連携による付加価値の高い加工品の開発

地方独立行政法人青森県産業技術センター農産物加工研究所と連携し、23年度は、ワイン(清澄・混濁)や酢、シロップ煮、フリーズドライ、真空調理、トレハロースや果糖を加えたジャムなどを試作した。また、従来からあるジュースやジャム、コンポート等のブラッシュアップも進めている。これら加工原料を利用して地元菓子店が新たななもも製品づくりを始めており、JA直売所で販売が行われるなど地域活性化に寄与している。



加工の風景

(4) 統一名称「つがるの桃」と出荷規格統一で販売力強化

2JA間の技術共通化にむけて、平成23年度には山選果基準の統一や園地相互視察等で技術・品質格差の調整が図られた。

また、販売にあたっては統一名称「つがるの桃」でロットの拡大を図り、販売力の強化を図っている。

4. 農家等からの評価・コメント(平川市 木村氏)

私もいち早く桃の栽培に取り組んだ一人であるが、栽培技術や新たな情報をいち早く提供してくれるなど普及指導員には感謝している。現在、美味しい「つがるの桃」を全国に売り出したいと考えているので、今後も私達を指導してほしい。

5. 普及指導員のコメント

(中南地域県民局地域農林水産部農業普及振興室 磯辺主幹)

「つがるの桃」は現在20haまで拡大し、生産者数、販売金額とも順調に増加しています。今後も新たに植え付けられた苗木が、果実を生産するようになれば、生産量も増えると思われます。農業普及振興室においても重点的な指導対象として、栽培者の収益力向上に向けて2JAのもも部会を支援していき

たいと考えています。

6. 現状・今後の展開等

2 J Aとも、ももの栽培に対する意欲は高く、新規作付者の増加や生産量の拡大が続くと予想されることから、

- (1) りんごとももの作業を仕分け、それぞれが適期作業できる体系の構築
- (2) 栽培マニュアルに基づく、栽培技術の高位平準化と高品質・高糖度ももの生産拡大
- (3) 2 J A選果場の一元化による集出荷体制の構築
- (4) J Aつがる弘前とJ A津軽みらいの統一産地化の推進
- (5) 生産拡大に伴う販路の拡大と長距離輸送技術の獲得

を実現することで、中南地域にりんごとももの両品目で所得を確保できる「りんご地帯におけるもも産地」の早期育成を図っていきたい。